

六 車 進 子

日本社会学史の文化社会学的考察の意義

一つの学問の歴史は種々の角度から考察できる。まずそれはその属する社会の制約の側面からみられる（社会的説明）。第二に学問は、その直接の活動主体が個人であるから、個人的な規定の側面からみられる（心理的説明）。個人的規定とは内容的には学者の個性の影響であり（個性的要因）、形式的には人が他の学者や既成の学説に対して自説の独自性の意義を主張しようとする心理的動機の作用である（形式社会的要因）。第三に学問はその内在的發展の關係が明らかにされなければならない。到達された一つの理論はつぎの理論が演繹される出発点となり、諸学説の継起には理論的な秩序が現われるからである（論理的説明）。これを社会学の歴史において考えると、第一は社会学史の社会学¹⁾、第二はその心理学²⁾、第三はその論理学であるといえよう。

ところで、日本の社会学の歴史を考えようとするとき、なによりもその社会学が問題になると思う。一般に、社会学にとっては「社会学の社会学」がまず問題である。それは社会学の立場の特殊性に規定されている。たとえば、社会学の始源の問題は社会学者の特別の関心の対象となっているが、それは、およそ社会学は後進的な、複雑な科学史的背景をもった一つの知的文化であり、一つの社会現象であるから、社会学の発生もまた社会的背景のもとで理解されなければならないという社会学の立場の特殊性によっている。また、社会科学の領域において文化の問題を取り扱い、その究明に努力しているのはドイツの文化社会学 (Kultursoziologie)、アメリカの文化人類学 (cultural anthropology)

および後者と緊密な類縁関係にある文化社会学 (cultural sociology) であるが、この二系統は、同じ文化の問題においても、それぞれの学問的伝統や社会的背景の相違によって、その学的方法、研究方法の仕方を異にしている³⁾。

近代の科学文化というまでもなく、日本にとっては、最初輸入文化であった。科学の一分野である社会学もヨーロッパのその受容に由来している。そこで日本の社会学の歴史は、通例明治初期におけるハーバート・スペンサー (H. Spencer, 1820~1903) の学説の移植から、さらに近時はさかのぼって維新の前夜オランダへの留学生によってオーギュスト・コント (A. Comte, 1798~1857) の思想がもたらされた事実から叙述されている。ところで、およそ科学の歴史はある領域の現象に関する認識の展開をあとづけることと、この認識されたものの伝流の状況を確認することとの二面を含んでいるが、日本におけるコントやスペンサーの学説の伝流を問題とすることは、コントやスペンサーの学説の伝流史になっても、必ずしも直ちに日本の社会学の歴史とはならない。一般に、文化の受容ということは単に受身的に解釈されるべき事態を意味するものではない。受容される文化は受容する側の主体的条件 (受容のアプリオリ) によって選択、評価され、新たに展開される。この主体的条件は受容される文化をもつ社会とそれを受容する社会の間にある空間的距離、社会的距離、および文化的距離によって規定される。二つの社会の間の距離の遠近に方向づけられる外国への疎遠感や近親感、国内の統一性や分散性に規定づけられる外国への閉鎖的態度や開放的態度、さらに、受容する社会の側の認識や理解の能力の発達の一般的状態、その価値意識、関心の focus、問題になる外来文化に対応する受容者側の文化領域の状況などが、外来文化の評価を左右し、その批判、展開を制約する。

日本の社会学の展開はコントやスペンサーの影響によって促されたが、そこには日本の社会的条件とか、学問・思想の伝統とかの種々の要因が参加している。これらのものを閑却し、渡来の年代記に終始するのは、もちろん「歴史的」態度ではない。とくに日本にとっては外国の社会学はすでに高度な、しかも異質な思想的伝統をもつ社会に移植されたのであり、また社会・人文科学においては、旧来の思惟の伝統と新渡の思想の交替は比較的漸次的であったので

あるから、問題は在来⁴⁾の思惟伝統の中に、たとえ体系的ではなくともなんらかの意味で社会学的といえる思想がなかったであろうか、もしあったとすれば、それは外来の社会学とどのように交渉し、さらにどのように自説を展開していったのかということである。

以上、社会学が、一般に、長い科学史的背景をもつ一つの知的文化であり、一つの社会現象であることによって、さらに、特殊的に、我国においてはそれが純粹内在的に発展をとげてきたというより、他の近代科学と同様に、明治維新——開国を契機とする急激な文化接触において、しかも学問的非処女地に流入され、その上に展開されたものであることによって、その発展の「歴史的」考察は社会学的視点をぬきにしては考えられないであろう。この問題は、同時に、それ自身ひとつの文化社会学の問題でもある。

二

文化受容の主体的条件は、既述のように受容する側の社会の諸条件によって規定される。それらの中でも、文化的距離によって規定される、この社会の認識や理解の能力の発達の一般的状態、その価値意識、および問題の外来文化に対応する受容者側の文化領域の状況はその重要なものと思われる。なぜなら、文化的発達段階の差（量）および文化的個性の異（質）にみられる文化的距離のあまりの離反は受容を現実には不可能にするものであり、さらに、社会学が日本という全体社会を場として展開される場合、社会が外来の学問文化を原理的に取り扱う専門化された分化組織をもっていなければそれを選択し、評価し、展開することができないからである。外来の学問文化を専門的知識によって原理化することができなければ、その単なる「模倣」におちいらざるをえない。

日本における社会学の容受に関してこれらの問題を考えてみよう。まず、社会学という科学が日本人に知られる前に社会に関する高度な思惟や考察はすでにあった。その主要なものはいうまでもなく儒教的思想である。また、社会学に通ずる科学的思惟態度もオランダの学術（医学、兵学、天文学、地理学等）の輸入によって漸次促進されてきていた。儒学思想は自然界の中に読みとっ

た理を社会界に普遍化しようとし、宗教と独立に徳教を主張し、人間社会における客観的規制の存在とその意義をもっとも大規模に主張したものであるが、ここにみられる社会的現実主義と一種の合理主義が西洋の近代的合理主義に近づき、その理解を容易にするものであることは必然である。いな、すでに十八世紀の西洋思想史に儒教思想が与えた影響は、これを見捨てることのできないであろう。また、ここにおける自然の秩序に連続するものとしての社会の秩序の認識ないしは社会の基本的な人間秩序に関する認識等は社会学とその関心の focus を同じくしている。このことから、西洋の思想を儒教の思想と対照し、儒教の中にあるものは仮にその表現をかりて受容するということが起ってくる。希哲学（哲学）、致知学（論理学）、格物学（物理学）などの訳語が中国の古典に由来することはいうまでもなく、フィセリング（Simon Vissering 1818～1888）の講義の翻訳である「泰王国法論」（訳者、津田真道、慶応二年）および「万国公法」（訳者、西周、慶応四年）にみられる権（権利）や義（義務）の思想はすでに『孟子』にあり、平等思想は王道思想にすでに見出される。西周がその *Encyclopedia*（「百学連環」明治三年末頃起稿）を著すにあたり、「和漢のことを斟酌して説諭する所なり」といっているように、西洋の学問思想の受容は、これに在来⁶⁾の思想を配し、あるいは自己の解釈を交え、東西の学を総合して体系化しようとする企図のもとに行なわれている。

最後に、外来の学問文化に対応する受容者側の文化領域の状況については、学問所、すなわち「蕃書調所」（安政三年、1856設置）の存在、海外との活発な交渉、そこにもたらされた学問の分化があげられなければならない。徳川吉宗の時代の文化統制策の緩和（享保五年、1720）によって、オランダの語学および文化を研究する一派、蘭学派が出現する状況になったが、ここにおいて研究されたのははじめは主として自然科学（医学、兵学、地理学、数学、天文学等）であった。これら自然科学の研究者の中からやがて人文や社会の問題に関心する学者が分化してきたが（その代表的なものとしては、江戸の蘭学者、小関三英一1787～1839、高野長英一1804～1850、渡辺崋山一1793～1841、佐藤信淵一1769～1850、および帆足万里一1778～1852などがあげられる）、人文や社会の問題をそれらに関する西洋の体系的知識との関連において考えるに至るのはべ

リーの来航（嘉永六年，1853）による安政の開国（安政元年，1854）以降のことである。この安政以後の人文・社会科学研究の興隆をもたらした要因として二つのことが考えられる。一つは当時活発になりはじめた海外との交渉であり、二つは西洋思想研究のための学問所の設置である。万延年間から慶応年間にかけて外交使節団や留学生の海外派遣が試みられるようになる。外交使節団の一員として海外におもむき、幕末より明治維新の啓蒙期に活躍した代表的な者には福沢諭吉（1834～1901）や福地源一郎（桜痴 1841～1906）らがいる。前者はとくに、社会学の実践者、日本のレアル・ゾチオロジーの開拓者と評される者であるが、西洋文明との接触は自己の社会に対する比較観察の態度を促進し、客観的考察態度を助成し、これによって社会学の成立の背景となっている。また、留学生としてつとに西洋の学問研究に取組み、わが国の洋学研究の基礎をきづいた者として西周助（周 1829～1897）や津田真一郎（真道 1829～1903）、さらに外山正一（1848～1900）らがいる（西と津田は文久二年、第一回留学生としてオランダに渡り、幕末より明治十年に至る第一期啓蒙期の代表的学者であるが、外山正一は、中村正直と共に、第二回留学生として慶応二年イギリスに渡り、その活動期は主として明治十年前後である）。彼等は西洋の人文・社会科学の移植に直接たずさわった者であり、とりわけ西と津田は日本の社会学の成立に関して記念されるべき人物である。第二の要因に関して、外来の学問文化の研究および翻訳の拡大方針に基づいて設置された「蕃書調所」の存在に注意しなければならない。これは、それまでの翻訳局、「蕃書和解方」（文化八年，1811設置）の後継である「洋学所」（安政二年，1855 設置）がさらに改名されたものであるが、従来のようにオランダ語 およびそれを通しての西洋文化の研究、翻訳を行うのみでなく、新たに学徒を集めて教授する機関であり、研究と教授をかねた西洋の学問文化のための最初の官立学校であった。これは当時の唯一の大学、湯島の昌平黉に対するわが国における新しい大学の出現である。この新しい大学はやがて「洋書調所」と改名され（文久二年，1862）、さらに「開成所」と改称されて（文久三年，1863）慶応四年（1868）一時閉鎖されるまで洋学研究の中心であり、多くの優れた学者、種々の学問研究を生んだところである。

西洋の学問の受容の過程において、今日の「専門」という概念に基づいて専攻「学科」の分化が推し進められたのは、また、「蕃書調所」における学問研究の方法上においてである。それは、創設当初、蘭英の文法、読法の教授を目的とするにすぎなかったが、外国文化の研究が高くなり、広くなるにつれて、百科辞書の知識ではすまされなくなり、一定の範囲を限って深く研究する方法（「学域」）が起り、ここに個別学、専門学の意味における「科学」という新しい語が出現したのである。蘭学、英学および仏学（安政五年）、独学（万延元年）というような専門化もその一つであるが、固有の意味での専門学も生れ、それぞれ専門家がその任にあたった。博物学（物産学 文久元年）、舎密学（化学 慶応元年）、算学（数学 文久三年）などであるが、文久三年、西周の記すところによると、「蕃書調所」には他に物理、分析、植物、地理、歴史といった学科があったことがうかがい知れる。この傾向がやがて精神科学の方面にもおよび、東洋の性理学に対応する学問を西洋の学問によって研究しようとする動きが胎頭してくる。西周もまたその留学に際して、統計、法制、経済、政治および外交方面の学問の修習と同時に哲学に対する強い関心を披瀝している。¹⁰⁾日本における人文・社会諸科学および哲学の研究、さらにその分化と総合という学問の体系化の試みは、ここに、この新しい大学の存在によって契機づけられたというべきであろう。

学問や書籍の分類法は、これをすでに中国や日本はもっていた。中国では儒学の経・子・史・集の分類とか、六朝時代の文・史・玄・儒の分類とかがあり、日本では本居宣長の神学・有職・史・歌学の分類がある。ただし、近代の実証的諸科学の発達が人間社会に関する科学を添加して、やがて諸学の分化の上に総合的な学問体系を作り上げようとする学問的企図に関して、西周の「百学連環」の試みに先立つこと二十数年前、「窮理通」においてそれを示した帆足万里の存在は注目されなければならない。それは「蕃書調所」の仕事にもまさる、日本科学史上、稀な労作である。「『蘭学を通して儒学的な知的体系のなかに取り入れられた西洋の自然科学は、やがて天文学・気象学・物理学・化学などの各領域において分化・発展していくとともに、伝統的な知的体系の構造的な変革を準備しはじめた……』（武谷三男『自然科学概論』二巻）といわれるが、その大きな変革の口火を切ったものとして『窮理通』は第一に指を屈せらるべき

であろう¹¹⁾と。それは蘭書より自然科学の知識を包括的に伝えたもので、内容は原暦、大界、小界、地球、引力、大気、発気、諸生の項目に分かれている。これは天保十年（1839）になり、コントの『実証哲学講義』（1830～1842）の刊行とはほぼ時を同じくしている。最後の「諸生」は人類、人種、人口、国民性、言語、日本国家の生成に関する古典の解釈といった社会科学的な分野を包括し、科学的方法を人間現象の研究に応用しようとする企図を示している。それはやがて幕末から明治にかけての「西洋性理之学」「経済之学」「ヒロソヒー之学」（西周）への関心へと連続してゆくものであろう。「『窮理通』は近代科学の体系的な叙述として日本の『実証哲学講義』であり、そこには社会学の部門はまだ成立してはいないが、それを予感していたといえよう¹²⁾」。

「蕃書調所」における洋学研究は、維新直後、西の主宰する「沼津学校」（明治元年、1868年に設立された「沼津兵学校」に明治二年、文学科が併置されたもの）および津田の主宰する「静岡学問所」（「静岡文学学校」ともいう、明治元年設置）によって受継がれたが、これらは徳川氏と共に静岡に移転した旧開成所の学者を教授陣とした、徳川氏によって明治時代にまで持ち越された事実上の大学である。また、幕末における洋学研究は私塾によっても受継がれ、後には旧開成所のメンバーを中心とした学者の団体、「明六社」（明治六年、1873立社会同の議を樹立）によって受継がれた。この「明六社」は、明治八年、当時隆興のきざしをみせてきていた民撰議院設立運動（自由民権運動）に対する言論統制によって解散を余儀なくされたが（研究会としては明治二十年頃まで存続している）、もしこのような事態がなければ、そのまま「東京学士会院」（明治十二年、1879）、のちの「帝国学士院」の母体となるべく発展するものであった。維新後、明治元年に復活された昌平黉の廃止（明治四年、1871）をしりめに、旧開成所はその分局からやがて独立した「南校」、「新大学」として再生し（明治四年）、やがて「東京開成学校」（明治七年、1874）となったが、学問文化の主流は、加藤弘之（1836～1916）によって明治十年（1877）東京大学が創立されるまで、旧開成所の学者によって保たれていたといえる。当時学問的資性と教養をもっていたものは旧開成所の学者をおいて他になかったといわれる。このように、徳川幕府によって組織された洋学研究のための学問所の上に近代日本における人文・社会科学研究が活発に展開されるのであり、この意味において徳川幕府の科学史的功績は高く評価されなければならない。

これらの主体的条件の上に、外来の社会学の理論は旧来の思惟伝統によってどのように受容され、後者は前者との交渉においてどのように自説を展開していったであろうか。この問題は、それ自体文化社会学の問題であると同時に（文化）社会学的視点の上に立つ社会学理論の展開の問題である。このような意味での日本の社会学の「歴史的」考察は、蔵内数太博士の「日本における社会学の成立」において他にみあたらない。¹³⁾それは理論的な社会観の基礎となる思惟の多くみられる儒学思想およびそれが風靡していた江戸時代の社会論から筆を起し、西洋との接触における社会学理論の形成を三つの段階に分けて考察している。¹⁴⁾この第三段階以降の時期に関して、すなわち西洋の体系的な社会学が移植されて後の時期に関して、外来の社会学理論と在来の儒学的思想との「綜合」の企図の上に立つ社会学理論を志した代表的なものとして西周、津田真道、有賀長雄（1860～1921）、建部逕吾（1871～1944）、遠藤隆吉（1874～1946）らの社会学理論が挙げられよう。本論は西周に関して、特にその学問体系化の企図を中心に検討することを目的とする。

以上において、日本の社会学の歴史の考察における社会学的視点、とくに文化社会学的視点の必要性和意義を考えたのであるが、この問題および上記の諸社会学理論を取上げることについて、ここに若干の補足を行っておきたい。

文化の問題は一般に社会の個性に関するものであり、文化社会学はそれぞれ歴史的、文化的に独自の社会を比較的な視点において把えることの意義をよく教えるものである。従って、文化の伝播の問題は、伝承のそれも含めて、個性的な事柄である。筆者はかつてコントの人間社会の科学と愛の人類教の主張を孔子の「知」と「愛」に対応させ、「論語」の社会学的原理化を試みた。¹⁵⁾それは筆者が、社会学の理論をその生けるものとしての「論語」のさらに祖述である下村湖人の作品の社会学的評価において理解したからであった。¹⁶⁾筆者は社会学理論の受容において、すでに西洋的社会および人間の類型（個性）、それらに対する東洋的社会および人間の類型（個性）といった文化社会学的問題の撰択、評価を与えられていたというべきであろう。考えてみるに、この問題は単に社会学の理論に軋触するばかりでなく、今日の思想的問題一般とも関わるものである。¹⁷⁾いま、日本の社会学の歴史を、とりわけ東洋の思想との関連において示された社会学の体系的知識の歴史を振返ろうとすることは以上の関心の必然的展開にすぎない。

幕末から明治十年頃までは、それまでのさまざまな社会の分子が急激な社会変動によってそれぞれ集団をなし、相互に対立し、複雑な社会過程を形成してゆく激動の時代である。それは、過去の社会からの「脱退」を余儀なくされ、それを常に「回想」することにおいてある「前集団」が生成され、それが新しい社会に「加入」してゆくときであり（王政復古を王朝復古と考え、極端な排外主義、保守主義をとる国学者、旧幕府政府時代の残存分子、鎖国攘夷論時代の残党、新政府に容れられない士族、神官等）、薩長藩の武士および一貫して開港交易主義をとる、一新思想の支持者であり、維新を思想上支えた旧開成学校の学者達が「役割集団」として新政府を「代理」し、あるいはこの政府内部における反対派が「逸脱」してゆくときであり（攘夷論の一変種である征韓論者たち）、さらに新政府の中から「後集団」が「出現」し、「反抗」してくるときであった（急進的民権主義者、政治史上の自由民権運動家たち、ここには、反政府運動という一致において、「前集団」の分子の一部と「役割集団」の不満分子の一部が同時に合流している）。さまざまな分子、旧政府の残存たる矯激な不平分子、また、非調和的、非妥協的な分子、および武力的民権論者の相交錯する激動のときは、しかし、明治十年（1877、西南の役）をもってひとまず終りを告げる。西南の役は「維新の完成」であった。この間、学問・思想に関しては、啓蒙的、実証的、開進的ヒューマニズム・平等思想を標榜していた日本の啓蒙哲学第一期の学者たちはその内部に序々に意見の分化をみせていったが、とくに急進的民権論の活発化に伴って、哲学における在野派と在朝派の分化が生まれるに至って、彼らは後者の理論の母胎になってゆく。思想上においても、明治十年を分岐点として、その思想は自然科学的唯物論、進化論、差別思想（優勝劣敗、適者生存）としての強権的、社会的進化論の展開をみせてくる。維新直後読まれた英米の自由思想もしくは自由経済に関する文献、J.S. ミル（J. S. Mill 1806～1873）やベンサム（J. Bentham, 1749～1832）に代っ

て、明治十年頃になるとスペンサー、ダーヴィン (C. R. Darwin 1809～1882)、ハックスレー (T. H. Huxley 1825～1895) などの生物学的著作が読まれるようになる。ルソー (J. J. Rousseau 1712～1778) は明治六年以降、急進的民権論者の愛読するものであった。

この徳川幕府の崩壊、朝権の回復、開明の政治への要求運動の抬頭とときを共にし、しかも終始「役割集団」から離れず、現実感覚を失わず、さらにこの間、一貫して洋学の研究と教授活動に従事し、実証主義と天賦人権説専行時代の代表者であり、新政府の思想的支柱であった代表的なものは西周、津田真道、加藤弘之らである。(ただし、加藤弘之は明治十年代には進化論的立場から天賦人権論を批判するに至り、その哲学的立場をかえてくる)。

二

西周は幕末から明治十年代にわたるわが国啓蒙期思想界の最も卓越せる学者である。これは、今日、学者の多く認めるところである。すでに、明治十三年(1880)、当時の学界における西の卓越性を評して次のようにある。「論法皆致知(論理のこと)ノ学規ニ合スルヲ以テ、絶テ浮虚妄誕ノ病ナシ。其精神アリ、氣力アリ、老益壮ナルハ、実ニ今其比ヲ見サルナリ。余故ニ数々言アリ、曰ク、日本学士惟西先生ノミ西洋学士ノ風アリ、精神アリ、亦西洋学士ニ恥チサルナリト²⁾」。

西は社会学の創設者であるコントの思想の日本への最初の紹介者であるが、その業績の特筆されるべきもののひとつは、コントと同様に、学問体統論の試みである。学問の分類・総合という試みにはコントおよび J. S. ミルの哲学からの影響は否定されない。西は一切の経験科学を統一する百教一致の学として哲学(『一定総括の学問⁴⁾』)を考えた。こゝに、諸科学の高度の総合学としての哲学——実証哲学を考えたコントの影響は西みずからのいうところである。西はコントの学問体統論に共鳴し、天文学、格物理学(物理学)、化学、生体学(生物学)、人間学(社会学)をもって学問の基本的なものと考え、これを五学、五原、原学とよんだ⁵⁾。一般に、学問のあらたな分類・総合という問題は歴史的

現実の要請の中から生れるものであり、新しい学問の創設は、その体統の不備を埋めるべき必要の自覚から生れるものである。コントによる学問の体統論および社会学の創設はこの過程の産物である。しかし、同時に、西にとって、維新を期として海外の科学が一度に流入してきたとき、さらに、科学的知に基づく人類とか社会の福祉の増進ということが考えられ始める啓蒙期にあって、諸学の分類ということは特別な関心事であつたにちがいない。この関心を現実に実現させえた大きな要因として、西の、天地人の諸現象を宏大な宇宙過程に一貫する法則性においてとらえようとする 儒教思想の素養をみのがすことはできない。哲学は、西にとって、最初、「性理之学」であつた。さらに、実理（実証）の方法こそは人の従事すべき、それによって真理を発明するに足るものであり、これを除いて万象を前兆する方法がないものであると考え、実に前兆は人智の本質であり、前兆の当否はその真偽を証するものであるとし、災害は神にあらわして人に存するのである、というコントの実証哲学の全体系を一貫する実証精神あるいは歴史的方法は社会的現実主義に基づく経験主義の態度をとる儒教思想に通じるであろう。「温古知新」（『古を温め今世を明察す』）や「述而不作」は個人の恣意的理念に対して、徴験された知識を重んずることを意味している。社会学の任務は「予見するために見る」ということであつた。

西の学問体統論に関しては、「百学連環」および「百一新論」（慶応三年起草、明治七年出版）が主要な文献である。前者の萌芽的思想は「復某氏書」（明治三年草稿）にみられ、それらを補充するものとして「知説」（明治六年）「尚白割記」（明治十五年起稿）「生性発蘊」（明治六年起草）などがあげられる。

「百学連環」において、西は学（Science）と術（Arts）という概念の分析をもって学問分類の第一の体系とするが、この概念を「知行」との対比においてとらえている。「學術の根源なるものあり。知行の二ツ是なり。……知の源は五官の感ずる所より発して、外より内に入り来るものなり。行は其知に就て内より外に出るを云ふなり。故に知は先にして、行は後にあらさるへからず。知は過去にして、行は未来なり。……知行は學術の源なり」と。両者の区別について、「学ハ専ラ智ノ性ニ根サシ観門ニ属スル者ナリ。術ハ其知ル所ニ

循ヒテ之ヲ行ウノ上ニ係ハリ、行門ニ属スルナリ⁹⁾」とある。観門と行門の区分は、「百一新論」においてもみられるが、今日の理論的部門と実践的部門の区分に対応するものである。しかし、学と術との関係は必ずしも「一学アルハ一術アリト謂フベカラ」ざる故に、前後篇にわけ、「前篇ニハ学ヲ主トシ術ニ及ヒ¹⁰⁾」、「後篇ニハ術ヲ主トシテ学ニ及フヘシ¹¹⁾」とした。この学と術の区分に基づく学問分類の第一の体系に次いで「普通の學術」と「殊別の學術」がわけられる。普通学とは「一理の万事に係る¹²⁾」ものであり、「専ヲ心理ト物理トニ属セス、反テ比両理ヲ記載解釈スルノ具タル者ナリ¹³⁾」とある。殊別学は「唯ター事に関する¹³⁾」ものであり、さらに心理上学と物理上学に分類される。ここで西の學術の類次は、普通の學術、物理の學術、心理の學術をもってその三大綱とされる。いまそれぞれに属する學術を列記すると、歴史、地理学、文章学、数学（以上普通の學術）、格物学（物理学）星学（天文学）、化学、造化史（自然史）（以上物理の學術）、神理学、哲学、政治学、制産学（政治経済学）、計誌学（統計学）（以上心理の學術）となる。

普通学の第一に挙げられている歴史において、「学は素より古へを知り、今を知り、彼れを知り、己れを知るを要するが故に、総て諸学を以て歴史と称するも亦可なりとす¹⁴⁾」という。歴史を第一に挙げたことについては西洋近代の進化思想、特にコントの三段階の説の影響が考えられるが、西においては、また、それが「温古知新」の道理に合うものと考えられていることからみて、上にみられる彼の学問観なり歴史的認識の態度と共に、東洋の歴史観に負うところ大きいものと考えられる。「第一 History なるものは古来ありし所の事跡を挙て書き記し、所謂温古知新の道理に適ふを以て普通とす。学者苟も今を知るを要せんには、必ず先つ之を古に考え知らさるへからず¹⁵⁾」と。すでに、社会変遷に関して法則的なものをみる思惟は儒教思想の中にあるが、一般に歴史過程における法則への認識は社会学の主要な関心のひとつである。普通学の第二に通古学（考古学）に対する通今学（現代史学）としてあげられた地理学において、西もそれを「第一 Mathematical Geography（数学上之地理学）、第二 Physical Geography（物理上之地理学）、第三 political Geography（政

学上之地理学¹⁶⁾」に分類している。この分類についてはすでに渡辺華山によって示されているが、日本において、合理主義的学問が物理、自然科学にとどまらず、事理、人事社会の学問をも包括することが注意され、まずそれにあげられたのが地理学であった。社会や国家に関する体系的知識とか西洋の歴史学とかは、まず地理学の中で受容されている。それは兵学者的認識態度に裏づけられており、軍事的動機によって促進されていた地誌に対する学的関心に帰因している。¹⁷⁾西は普通学に四学を定めたことについては、なお「又比四学ノ内ニテ歴史文学ハ心理ニ属シ数学ハ物理ニ属シ地理ハ其中間ニ在リトス¹⁸⁾」といい、後、「知説」において、四学の次序を文学、数学、歴史、地理学と改めている。¹⁹⁾西はその学問体統論において、この学問受容の過程における地理学の位置を示しているといえよう。地理学が物理と心理の中間にある学問であるとするのは、それがその内に物理から心理への分化をもつことと符合するが、地理学はいわばコントの実証哲学の全体系の縮図版の観を呈している。考えてみるに、地理学は、当時、その包括する内容の広さ、その諸学における位置からいって諸学の中で貴重な地位をしめるものであったのだろう。第三にあげられている文章学は西の思想の根本的立場と関わる重要な意義をもつものと考えられるが、ここではふれない。最後の数学は、以上三つものとは異なりコントの影響によるものであろう。

次に、西は殊別学を二分しているが、それが基づくところの物理と心理の概念は、さらに、理の概念の分析に基づいている。これについては、他に、「尚白割記」「百一新論」「理ノ字ノ説」（明治二十年以降起稿）が参考になる。西の理の思想は宋学の「理氣説」から導かれ、理とは自然界と人間界の一切を律する法則または原理である。理は宋儒以来、特に論じられるようになったものであり、そこから「性理学²⁰⁾」も生まれている。西は、ここで、ものどものとの関係には必ず一定の理が存在するという宋学の考えに西洋の合理主義思想を結合させることを試みる。西は、理という言葉の訳が西言にないところから儒者の「西人未曾知理²¹⁾」というような誤解が生まれるとし、また、自然と人間の現象をすべて天理でかたづけようとする宋学窮理説の観念主義を批判して、西

洋における理を分析的に解明する。西の物理と心理の区分はそこに見出される理の二つの主要な理解、レーズン（道理、理性）とラウオブネチュール（理法、天然法律）²²⁾に対応する。「物理トハ天然自然ノ理」であり、宇宙一切草木生物すべてこの理に外なることのできないものである。心理とは「唯人間上バカリニ行ハレル理デ、人間デナクテハ比理ヲ会スル事能ハズ、亦人間ナラデハ比理ヲ遵奉スル事モ出来」る理である。よって、前者をア・プリオリといい、先天の理とし、後者を、ア・ポステリオリといい、後天の理とした。まず先天の理によって人間ができ、その人間によって後天の心理が自然に備わる故にこれをネセンテイト、「己ムヲ得ザルニ出ヅルノ理」²³⁾という。また行門、観門の区別に際して、前者はもっぱら心理に基づいているから物理の論にはおよばないが、後者の方では物理を参考にしなければならないといっている。²⁴⁾要するに、心理は物理に基づき、そこから必然的に派生してくるものであると考えられ、さらに、前者の経験的なことが明らかにされている。このようにして物理上之学と心理上之学が分類されるのであるが、その方法は学の対象そのものに基づくというより、それを律する理の種類に基づいているといえよう。

合理主義的学問が自然界から社会界にまで発展することを考え、諸学の領域を区分し、哲学をしてそれらを統一させ、かつ、それらを分業的に促進させる学であると考えた西は、それによって、さらに社会生活の秩序（「次序」）と進歩（「進動」）を考えたのである。西の諸学の統一という課題は学問の実践性を重んずる実学の思想と不可分であり、それは、また社会の再組織を考えていた当時の思想に特徴的なことである。

「大卒是らの學術皆其源トを形氣家の道理（物理のこと）に本け、其用ヒを性理家の道理（心理のこと）に附して備はらぬはあらし、是を此形氣性理一貫の実理に本き、天授の五官によりて初めたる学ヒなる、苟も実理をし講しなハ、誰かは比道理を離れ得へき、……又学ヒの道のおのおのそれぞれ器械ありて、是を実理に試験することを得へし、しかしてかかる學術によりて其人材を培養し、政律の科を講する者は民生を理め、史道の科を講する者は民情を理め、利用の科を講する者は民用を厚うし、医療の科を講する者は民病を

治し、武備を講ずる者は民患を防ぎ、巧芸を講ずる者は民生を華やかにし、かの俚を濯ひ雅に化らしむ、かく天下を経綸し、万物を發育し、生民をして永く和熙寿康の域に昇らしめ、尚日新の道により講究やます将来真聖人出るを待ち、以て四海共和、無疆治休の源トを開きなむとす、是比五官の実徴によりて初め形氣性理一貫の理りに本つきて立たる道なり²⁶⁾。実証主義経験論に立つ「実証哲学」体系の構想があるというべきであろう。ここには西洋の哲学思想、とりわけコントや J. S. ミルのそれとの接触、時代の勢の作用はかくすべくもない。唯、これらをもってしても、それらを受容し、評価し、展開させえるだけの学的高さと深さ、関心を主体がもっていなければ、それは実現不可能であったであろう。西が古今東西の哲学を学び、コントの実理学に共鳴するにあたって、儒学²⁷⁾の思想、とりわけその性理学に注目し、それとの接合を考えたことは否定されない。天文物理界の法則に関する合理的な人知を人間社会界にまで拡大しようとしたコント哲学は、天地人の存在の一貫的把握を考える儒教思想の持主、西にとって出会うべくして出会った思想であったといえよう。

いま、その一端を「生性発蘊」、その表題の意味することを通じて触れておこう。

明治十年頃までの最高にして、無二の哲学説であり、当時支配的思想であった実証主義哲学の一記念碑といわれる「生性発蘊」は「古今東西儒学、哲学の流転、性理の論説」を説き、「坤度の実理学の地位を挙げ²⁶⁾」ることを旨とするものであるが、なお、その表題は「四書」（『孟子』）にある文字によっている。日本の啓蒙期の学者の思想は西洋の哲学を日本伝来の思想や中国思想の事実と考え合せて理解し、表現しようとした和漢洋の混和思想であり、その場合、東洋人が西洋の思想をはじめてみずからのことばで表現するための難しさも大きかった。東西の哲学史を概観し、コント哲学を説明するにあたって、西は、東洋哲学（この場合、儒教思想）の存在論、人間学、方法論の上に哲学界の新しい学説、実理学をとらえ、彼の哲学的立場を表明しようとしていた。「生性発蘊」という表題はこの思索の過程を理解させるひとつの資料である。

「生性」の字は『孟子』の「告子章」からとられたものである。「告子章上凡二十章」の三節、冒頭に「告子曰く、生之を性と謂ふ、と」とある。第一に、それを「性」という

「生」とは何か。『易経』に「天地の大徳を生と言う」（繫辭下伝）、「生生これを易と
いう」（繫辭上傳）などのことばがみられる。天地の徳は「生」であり、天地より生まれ
るかぎりのものはすべて「生生」の性格をうけている、と考えられる。「万物の霊」とし
て万物から区別される意味の人間も万物と同じく「生」を性としている。同じ「天地の生
意」が人と万物を貫いているという思想——「天地万物一体」を「仁」と解釈したのは宋
代の程明道であるが、「仁」とは天地生生の徳そのものの意味である。この「生生」の説
は固有に中国的な思想もしくは世界観である。この「生生」の思想において重要なことは
宇宙的なものへのパトス、宇宙的な原理と共感しようとする感情である。この思想の問題
は、また儒学の方法論や人間学と深く関わってくるものである。

第二に、「生」がそれであるという「性」とはどのように考えられるものであるか。前
掲、『孟子』の「告子章」に孟子と告子が人性論を展開してそれぞれ性善説と「性に善悪な
し」の説を主張している。この「性」に関する問題は、また、中国思想において種々の議
論を生んだものである。それは孔子の「性相近也、習相遠也」（『論語』卷第九陽貨第十七）
の説にはじまって、孟子の性善説、荀子の性悪説、告子の「性に善悪なし」「性は生
なり」の説、韓愈の「性に上、中、下の三品あり」の説に及んでいる。中国の思想上、
「生生」の思想をもっともよく表わし、宋学の中でも陽明学的な思想家であった程明道は
「万物一体の仁」が「性」である、とした。後、朱子にもっとも影響を及ぼした程伊川に
よって「性」は人間の心を形成するいまひとつのもの、「情」と区別され（「仁」と「愛
」）、前者のみが「理」であると考えられるようになる。さらに「性」も「未然の性」と
「氣質の性」に分けられ、それぞれは、あるべき性とあるがままの性と解されるようにな
り、さらには、この前者こそが「理」である、と考えられるようになる。このように、朱
子学はこの「性」の一層の分析的論理の上にその人性論、性理学を展開していったのであ
るが、「性」が「性」と「情」に区分されるにしろ、いまだ未分化のものであれ、それが
「理」を内包するものであることにはかわりない。また「未然の性」においては規範、根
拠が意味され、「氣質の性」においては善悪混合の宇宙過程そのもの、すなわち「生生」
が意味されているが、いま「性は生なり」の説をこの文脈の中でとらえると、それは後者
の「性」において考えられるものとなろう。ただ、しかし、ここで朱子学の「性」の詳細
な分析にまどわされて見落してはならないことは中国の思想に独自な世界観、宇宙観と結
合している人間観であり。人間を常に宇宙的規模においてとらえようとする考え方である。

荀子の性悪説を別にして、儒教における人性観の基本は性善説である。朱子学といえど

もこの立場に変わりはない。この性善ということも人間を宇宙的規模においてとらえる思惟においてはじめて理解されるものではないだろうか。「性」を「生」もしくは「生生」との関係において考えるとき、性善ということもおのずからこの規模のものとして、この規模において考えられてくる。「性」は「生」の意味に他ならず、故に善である、と。「性は生なり」ということは、ここにおいて、「性は善なり」といういい方よりさらに一步進んだ意味を表現するものと理解されてくる。儒教には悪の讃美ということはない。そこに顕著な意識は道を楽しむということである。それは宇宙的な原理と一体化しようとする感情に他ならない。「性」は、いずれの場合においても、人の生来にそなわっているあるがまま、自然な生まれつき、本性 (nature) である。「生性」とはこの人間の本性が生命そのものの源泉であり、それはたえず「生生」して止まない宇宙過程そのものとその道理を分有しているものであることの意味を含んでいる。²⁸⁾

「発蘊」とは元気の蒸しこもっているようなもの(「蘊」)を分析してみせることを試みる、ということであろう。「生性発蘊」ということには、要するに、生命そのものの源泉であり、たえず生々して止まない大天地、世界と、そこに生まれ、その道理を分有する小宇宙(小天地)である人間をひとつの巨大な宇宙的法則においてとらえることを考え、そこにこもっている複雑な過程を分析的に考えてみようという企図がうかがえる。

「百学連環」はその総論に諸学の統一を論じ、その下に諸学の体系をのべていることにおいて、西の哲学体系とよばれるべきものにちがいない。しかし、ここにおいて注意されることは、百学の学、統一の学たる哲学を心理学のなかのひとつとし、そこに致知学 (Logic)、性理学 (Psychology)、理体学 (Ontology)、名教学 (Ethics)、政理家之哲学 (Political philosophy)、佳趣学 (Aesthetics)、哲学歴史 (History of philosophy)、実理上哲学 (Positive Philosophy) をあげていることである。コントの影響の強い時代、諸学の系統を立てるのに急な時代の著作としてやむをえざる矛盾であろうが、西の哲学思想は、その後、心理学を基本として論理学、倫理学、美学をもってその体系とする、という方向に整理されていっている。「是以、此三学取源乎性理一学、而開流於人事諸学、所以成哲学之全軀也、故曰、哲学者、百学之学也」²⁹⁾と。

西は、コントの社会学の詳細な紹介も、また、かれ自身の体系の組織化も行なっているわけではない。ただ、かれは社会学の創設者、コントの思想の最初

の紹介者であり、コントと同じく、人文、社会諸科学を包括した学問体統論を試み、日本におけるそれらの発展の基礎を築いた点において、日本の社会学史上において記念されるべき人物である。

註 日本社会学史の文化社会学的考察の意義

1) 蔵内数太「社会学」(昭和四十一年、培風館)参照

2) 社会学は本質上人間社会の自然学(Naturlehre der Gesellschaft)であり、人間的関係と文化的表現のいっさいを経験的・因果的に説明しようとする経験科学である、としたゾンバルト(W. Sombart 1863~1941)は、西欧の社会学の根本特質を精神の劣位化(Mediatisierung des Geistes)にみ、その起源を、従って、この特質の現われる1670年から1770年の間のイギリスとフランスの思想界に求めた(Der Anfang der Soziologie, 1923)。ここで問題にされているのは社会的事物を心的要素に還元しようとする西欧的・心理学的社会学であるが、ゾンバルトは後にこの社会学の始源は「一つの社会学の始源」(Der Anfang einer Soziologie)であると考え、精神や文化は心的原子に還元できないとし、精神的なものは、これを精神に還さなければならないとする精神科学的社会学をこれから区別した。これはドイツにおいて20世紀に入ってその発展をみせたものと考えた(Soziologie, was sie ist u. was sie sein sollte, 1936)。

3) 文化社会学に関して、関栄吉は西洋の文化社会学は自己への懷疑から生れたが、東洋における文化社会学の興隆は自己認識にその端を発しているといっている。(関栄吉、「文化社会学概論」昭和三十一年 関書院)

4) 蔵内数太 前掲書 参照

5) 後藤末雄(矢沢利彦校訂)「中国思想のフランス西漸」1, 2, (昭和四十四年, 東洋文庫144, 148 平凡社)

6) 希哲学については西周の章 註 29) 参照

「古之欲明明徳於天下者, 先治其國, 欲治其國者, 先齊其家, 欲齊其家者, 先修其身, 欲修其身者, 先正其心, 欲正其心者, 先誠其意, 欲誠其意者, 先致其知, 致知在格物」(「大学」)

7) 「百学連環」(大久保利謙編 西周全集, 旧版——以下全集, 旧と略す, 第一巻 昭和二十年, 日本評論社 11頁)

8) 蔵内数太, 「日本における社会学の成立」(前掲「社会学」所収)

9) 麻生義輝 「近世日本哲学史」(昭和十七年, 近藤書店) 参照

⑩ 西はホフマン教授(当時ライデン大学の日本語、中国語の教授)に提出した書面(文久三年六月)において、留学に対する心構えをのべ、日本の学校(蕃書調所)の学風を伝え、諸自然科学に加えて、国際関係の増進、内政ならびに諸般の施設の改良のために、さらに人文・社会科学学習の必要なることを伝え、さらに文化の向上のために万難を排して哲学とよばれる学問を修めたい旨を披瀝している。(全集 旧第一巻 解説による)

11) 帆足図南次 「帆足万里」 (昭和四十一年, 吉川弘文館) 119頁

12) 藏内数太 前掲書, 81頁

13) 藏内数太, 同書 第四章。

同書は理論社会学の書であるが、かかる章のもうけられていること、西洋の社会学理論と東洋の社会学的思维の「総合」が一貫して思考されていることから理解されるようにそれ自体文化社会学的文献であるともいえる。

14) 三つの段階とは、第一、西洋の社会現実そのものに関する知識が日本の社会現実に対する比較観察や客観的・批判的考察態度を惹起した段階、第二、西洋の科学の輸入にとまって社会現実に対する科学的・因果的・認識態度が促された段階、第三、西洋の体系的な社会科学、社会学が移植された段階、である。

15) 拙稿「論語と社会学」(関西学院大学, 社会学部紀要, 第15号, 1967.12)

16) 拙稿「下村湖人の思想における根本問題」(関西学院大学, 社会学部紀要, 第9・10合併号, 1964.11)

17) 拙稿「社会と愛」(関西学院大学, 社会学部紀要, 第12号, 1965.12)

註 西 周

1) 「前集団」・「役割集団」・「後集団」については、藏内数太、「全体社会の文化型と体制変化」(「社会学」所収) 参照

2) 萱生奉三、「西先生論集」(明治十三年)における土居光華の序文

3) 「生性発蘊」, 「知説」, 「尚白割記」等参照。「生性発蘊」に社会学を次のように紹介している。

ソシオロジー
「是(人間学)亦坤度の創意, ソサイテの語より変成する者, 人間相生相養の道を論じ, 其中に政事法律教法等の科を兼ねる哲学なり」

(大久保利謙編 西周全集, 新版——以下, 全集, 新と略す——第一巻, 昭和三十五年, 宗高書房 48頁)。明治十五年起稿の「尚白割記」に至って「ソシオロジー」は「社会学」と訳されている。Social, Society, Sociology が, 社会的, 社会, 社会学と訳されてくるのは, 明治十年前後以降である。

4) 「生性発蘊」(全集, 新 第一巻 45頁)

5)「堯居斯多・坤度嘗て五学の模範を著し、天上理学（天文学）、地上理学（格物学・化学）、生体学（バイオロジー）、社会学（ソシオロジー）と為す」（『尚白割記』全集 新 第一巻 167頁）。他に、「生性発蘊」、「知説」等参照。「致知啓蒙」もその草稿本には「五原新範」とある。

6)「生性発蘊」（全集、新 第一巻 56頁）

7)「百学連環」（全集、旧 第一巻 14頁）

8)同書（同書 14頁）

9)「知説」（全集、新 第一巻 459頁）

10)「百学連環」（全集、旧 第一巻 330頁）

11)同書（同書 35頁）

12)「知説」（全集、新 第一巻 463頁）

13)「百学連環」（全集、旧 第一巻 35頁）

14)同書（同書 74頁）

15)同書（同書 73頁）

16)同書（同書 82頁）

17)藏内数太「日本における社会学の成立」（前掲書、所収）参照

18)「百学連環」（全集 旧 第一巻 372頁）

19)「知説」（全集、新 第一巻 463頁）

20)性理および性理学という概念は、中国では宋、明時代の哲学において使われ、朱子学の程子は性理について次のようにいう。「天というようなときは、命というのがいい。学問で意義をこまかくいうときは、理というのがいい。人のことになれば、性というのがいい。人にしてもごく人を主としていうときは、心というのがいい。いずれにしても、その実は一つである」と（『日本哲学思想全書、思索篇』昭和三十三年 平凡社解説による）。性理学は当時の学者の間で思弁的な形而上学にまで高められたひとつの宇宙的世界観である。「性理学」は、はじめは「性理之学」などといって西洋の *Philosophy* に対応するものの意味において用いられているが、西においては、やがて *Psychology* の訳語として使用される。*Psychology* の現在における訳語、心理学も西の創語であるが、それは *Mental Philosophy* にあてられている（「心理学」西周訳、明治八、九年に前半、明治十一、十二年に後半刊行、原書、Joseph Haven, D.D., L. L.D. の *Mental Philosophy: including the intellect, sensibilities, and will* 1857）。*Psychology* が心理学と訳されるようになるのは明治十年後である（麻生義輝、「近世日本哲学史」232頁）。

21)「尚白割記」（全集、新 第一巻 168頁）

22)同書（同書 169頁）

- 23) 「百一新論卷之下」(全集, 新 第一巻 278頁)
- 24) 同書 (同書 288頁)
- 25) 「復某氏書」(同書 298頁)
- 26) 「生性発蘊」(同書 36頁)
- 27) 同書 (同書 30頁)
- 28) 「生性」に関して, 島田虔次, 「朱子学と陽明学」(1967 岩波書店) 参照
- 29) 「訳利学説」(全集, 新 第一巻162頁)

西によって, **Philosophy** に哲学という訳語が社会に対してはじめて公にされたのは, 刊本としては明治七年に刊行された「百一新論」をもって最初とする。「総て箇様ナコトヲ参考シテ心理ニ徴シ天道人道ヲ論明シテ兼テ教ノ方法ヲ立ツルヲ『ヒロソフヒー』訳シテ哲学ト名ケ」とある(全集, 新 第一巻 289頁)。それはすでに明治五年稿の「美妙学説」や「生性発蘊」に用いられているが, そこには何らの弁明もない。西は, 最初, **Philosophy** を「斐盧蘇比」と音訳したり(「開題門」明治三年稿), 儒学における成語をそのまま襲用して「性理の学」と表現したりしているが(「生性発蘊」「西洋哲学に対する関心を述べた松岡鱗次郎宛の書翰」(全集, 新 第一巻)), また, 「希哲学」と訳している。「津田真道稿本『性理論』の跋文」や「西洋哲学史の講案断片」(全集, 新 第一巻)において **Philosophy** を「希哲学」と訳し, 後者において, 東洋の希賢の意に等しいとしているが, それは周濂溪の「大極図説」にある「士は賢を希う」の思想に由来している。この「希哲学」から「哲学」という訳語が生れてくる。

なお, 哲学は「理学」あるいは「窮理学」とも訳されていた。その例としては「理学鉤玄」(中江篤介著訳書, 明治十六, 七年頃), 「理学沿革史」, 「希臘古代理学一斑」(末松謙澄, 明治十六年)などがあるが, それらは, また自然科学の意味にも用いられている。(「理学初步」慶応二年)。

「性理学」あるいは「理学」や「窮理学」から「希哲学」, やがて哲学へという, このような訳語の変化の背景には, 当然哲学とはどのような学であるかという考え方についての変化もまた予想される。西の文久頃の哲学概念は, 哲学は希賢の学であり, 希哲の学である。従って哲学は天下第一の学である(「西洋哲学史の講案断片」全集, 新 第一巻16頁)ということになるが, 後, ヨーロッパの分析=総合の方法に接するにおよんで, 哲学は心理と物理とを分析しつつも之を兼ね論じて心理に徹するの学である, あるいは, 哲学は百教を概論して同一の旨を論明せんとする所の学であるという考え方に至っている

(「百一新論卷之下」。全集 新 第一巻 289頁)。

Muguruma Nobuko,

Amane Nishi

——The introducer of sociology——

Résumé

For Japan, the scientific culture of modern age was at the start the imported one. However, when it was introduced, Japan was not the country with no cultural tradition but the one with the high and quite different cultural tradition. In general, the introduction of foreign culture should be studied from the standpoint of cultural contact, which is one of the subjects of cultural sociology. And it is the same with sociology.

The development of sociology in Japan should not be understood merely as the history of the introduction of its foreign theories to Japan. On this subject, we must consider the various social conditions and cultural traditions in Japan which act as a priori to the introduction of culture.

From this point of view, some sociologists must be investigated, especially those who tried to unite the old traditional thought with the new sociological theories of foreign origin. Here Amane Nishi, Mamichi Tsuda, Nagao Ariga, Tongo Takebe and Ryukichi Endo are to be named. In this essay, the thought of A. Nishi is examined. His great contribution to Japanese sociology, as well as other social sciences, is the systematization of sciences.